

～ 校長・教頭の ～

令和3年9月29日

NO. 5

四方山話



ルシアナ カリアンダラ
学校前の通りに咲いていました

アナログのよさ デジタルのよさ (Air mail)

三野 州豊

今年の夏もコロナに影響されました。飛行機では7時間ほどで日本とインドネシアは行き来出来るはずなのに、実際は本来の目的地にたどり着くまで、日本で14日間、インドネシアに入っても8日間と待機隔離が続きました。行って戻るだけで20日以上かかる計算です。「日本は遠きになりけり」ですね。まるで大航海時代に戻ったようです。

一方、私たちのコミュニケーションツールはめざましい発展を遂げています。SNSの場合、送り手と受け手のInternet環境が整わないといけない事情はありますが、電子メールやTwitter・Instagram・Facebook・Chat・Lineなど様々に駆使して、遠く離れた相手にも瞬時に意思疎通ができます。教育の現場(CJS)もTeamsを活用しての授業が続き、オンライン授業時には、日本とインドネシアとで離れていても同時に同じ内容の勉強を進めることができました。以前にはとても考えられなかったことですね。

先日、手紙を故郷に送りました。普通郵便ですと3週間ほどかかりました。時代に逆行するかのようアナログでの便りです。さすがにこうなると情報としては相当古いものになります。それでもはるばる遠くから届いたという重みはつくでしょうか。

皆さんは、こちらに来て絵はがきや手紙を郵送されたことがありますか。私が思うに、簡単に得る情報は、簡単に削除されるということです。もちろん情報量が多いのでどんどん消去したり上書きをしないと追いつかないことでしょう。ただ頂いたお手紙やはがきは不思議とすぐには捨てないものですね。

小学校の「書き方」(硬筆書写)の勉強に手紙やはがきの書き方の勉強があります。手本を見ながら、お友だちやおじいちゃんおばあちゃんに出してみましようというものです。暑中見舞いや年賀状をテーマにしたものもあります。SNSが5G時代に入る時代に相反するようにもみえます。そこで思い浮かぶ言葉が「不易と流行」です。

子どもたちは未来に生きる人間です。時代の流れにしっかりと乗り、誰よりも最新の情報発信生活を過ごして欲しいです。ただしそれは過去を捨てろという意味ではありませんね。

効率の悪い通信手段が未だに廃れることがないのは、また子どもたちの学習にあるのはなぜでしょう。意図しない相手に情報が拡散することがなく、読んで欲しい相手に本意をじっくり伝えたい場合、まだまだ手紙・はがきの役割はあるのかなと思います。また文字を打つのと書くのでは同じ文字言語でも、自ずとその能力は異なります。文を入力する能力も必要ですし、文を書き綴る能力も備えて初めて「書く力」も整って来るものですね。

手紙・はがきを綴る文化は大事にしたいです。遠い地に住む環境にある中、故郷のお身内やお友だちに近況だけでも「直筆」を送ると、きっと喜ばれます。

私の場合、字が達筆(乱筆)すぎて誰も読めません…。

